「家族と反こう期のぼく」

はらだ　けいた

ぼくは、今まさに反こう期に入った所だ。小学四年生になり、学校生活になれてくると、授業に集中出来なかったり、字も汚くなり、お母さんに注意され、さらにぼくのイライラした気持ちに火をつける。すなおになれず、自分がどうしたいかさえ、分からなくなってしまう。小学一年の妹の方が切り替え上手だ。

そういう時は、家の中にテントを建てて、一人で遊ぶ。ふわふわの小さい人形がぼくの遊び相手だ。でも、一人の時間が長くなるとさびしい気持ちになる。それを伝えるのは、今のぼくにはむずかしい。

そんな時、お母さんがぼくに「どうしたの」と、話すきっかけを作ってくれる。どんな気持ちなのか、どうしたかったのか、ぼくの苦しかった気持ちを受け止めようとしてくれる事が、ぼくは、一番嬉しい。

ぼくは、妹たちのお手本にならなくてはというプレッシャーもあり、きんちょうのど真ん中に立たされている。でも、本当はお母さんと二人ですごしたい日もあるし、手をつないだり、甘えたい自分をもっと分かってほしいとぼくは思う。そんな気持ちを、勇気出して家族に言えたとき、少しぼくは気持ちが楽になる。そんなぼくの気持ちを家族は理解してくれる温かい存在だ。自分でも分からない気持ちは、もっと家族には分からないのに、お母さんはぎゅっとだきしめてくれる。そんな家族に囲まれて、これからもぼくは反こう期をのりこえていきたい。